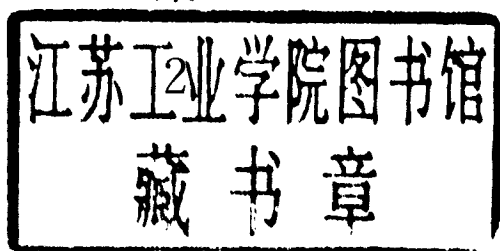


セネカⅡ 悲劇集 2

悲劇集
セネカ



総合人間学部図書館

西洋古典叢書

セネカ悲劇集 2 西洋古典叢書 第1期第4回配本

一九九七年九月二十五日 初版第一刷発行

訳者 岩崎 大英 宮城 徳也 竹中 健康 木村 健雄

発行者 尾崎 芳治 発行所 京都大学学術出版会

〒606-01 京都市左京区吉田本町 京都大学構内
電話 〇七五・七六一・六一八二
FAX 〇七五・七六一・六一九〇

印刷・土山印刷／製本・兼文堂

© T. Iwasaki, H. Ohnishi, T. Miyagi, Y. Takenaka,
K. Kimura, 1997, Printed in Japan. ISBN4-87698-104-3

定価はカバーに表示してあります

凡 例

一、本集はルキウス・アンナエウス・セネカの作として伝わる悲劇の全訳である。

二、翻訳にあたっては、ツヴィアラインの校訂本（O. Zwiernicki, *Lucii Annaei Senecae Tragoediae*, Oxford, 1966）を底本として用い、これと異なる読みをした箇所は脚註もしくは補註によって適宜示した。

三、テキストにおける校訂記号——削除記号「~~—~~」、挿入記号「[^]」など——は訳文では再現せず、それについて説明が必要な場合は註に記した。

四、訳文中の括弧「^{（）}」は訳者による文意の補足を示す。

五、訳註は原文の理解に資するものととどめ、訳文中に（一）、（二）、（三）で示して脚註とした。また、やむをえず長くなる註については「補註」として巻末に記した。ただし、訳文中には補註の特別の記号は付さず、脚註で（補註 A 参照）のごとくに示した。

六、固有名詞は原則として「オエディプス」、「ヘルクレス」のごとくラテン語形で統一した（原文でギリシア表記が使用されている場合はそのままとした）。ただし、「ギリシア」（グラエキア）、「フェニキア」（ポエニキア）など、慣例に従った場合もある。なお、「固有名詞ラテン語・ギリシア語表記対照表」を巻末に付した。

七、ラテン語固有名詞のカナ表記は次の原則に従った。

(1) *Ph, th, ch* は *p, f, c* と同音に扱う（*Phaetra* バエドラ、*Thyestes* テュエステスなど）。

(2) *cc, pp, ss, tt* は「*ッ*」で表わす（*Bacchus* バックス、*Hippolytus* ヒッポリュトゥスなど）。ただし、*tt* は「*ツ*」を省く（*Apollo* アポロ、*Phrynis* フェリスなど）。

(3) 音引きはしない（メーデーアーメデア、アテーナエーアテナエなど）。ただし、慣例や語感などを考慮してこれに従わない場合もある（テーバエ、ユノーなど）。

八、訳文欄外下部の漢数字は行番号を示す。ただし、翻訳という性格上、原文行との厳密な対応は期し難く、あくまでもこれは目安である。

目次

オエディプス……………	(岩崎務訳)……………	3
アガ멤ノン……………	(大西英文訳)……………	77
テュエステス……………	(宮城徳也訳)……………	157
オエタ山上のヘルクレス……………	(竹中康雄訳)……………	229
オクタウイア……………	(木村健治訳)……………	381

補註	447
----	-----

作品解説

オエディプス	450
アガ멤ノン	456
テュエステス	461
オエタ山上のヘルクレス	468
オクタウィア	475

総解説	483
-----	-----

固有名詞ラテン語・ギリシア語表記対照表	519
---------------------	-----

セネカ 悲劇集 1 収録作品

狂えるヘルクレス	
トロイアの女たち	
フェニキアの女たち	
メデア	
パエドラ	

セネカ

悲劇集

2

オエ
ディ
プス

岩
崎

務
訳

登場人物

オエディプス

テーバエの王。

イオカスタ

オエディプスの妻。

クレオ

イオカスタの兄弟。

ティレシア

テーバエの盲目の予言者。

マント

ティレシアの娘。

老人

コリントウスよりの使者。

ポルバス

テーバエの羊飼ひ。

使者

合唱隊

テーバエの長老たち。

場 所

テーバエのオエディプス王の宮殿の前。

オエディプス　すでに夜は追い払われ、太陽がためらいがちに戻りきて、
暗い雲に悲しげな光線が射している。

そして悲哀の炎によって陰鬱な光をもたらし、

貪欲な疫病に無人とされた家々を眺めるだろうし、

昼は夜がなした破壊をあらわにするだろう。

王の身の上を喜ぶ者が誰かいるだろうか。ああ、不実な善よ、

何と愛想のよい額で、何と多くの禍いをおまえは隠していることか。

高い峰がいつも風を受けるように、

そして広大な海をその岸壁で切り分ける断崖は、

たとえ静穏な海であつてもその波が打ちつけるように、

高き王国は運命の女神の手の内にある。

それにしてもうまくも父ポリュプス⁽¹⁾の王権から逃げおせたことよ。

今や心配から解かれた亡命者となり、もう恐れることなくさまよい、

天の神々よ御照覧あれ、この王国にたまたま行き着いたのだ。

二〇

(1) オエディプスが実の父と信じているコリントゥスの王。

わたしの恐れは口には出せないようなこと、つまり、父はわたしの手に
かかつて

死ぬというものだ。このことはデルビの月桂樹⁽¹⁾がわたしに警告したのだ
が、

もうひとつ、さらに大きな罪をわたしに宣告している。

父親を殺すことよりもまだ大きな罪などというものがあるか。

ああ、それは憐れむべき近親愛なのだ。自分の運命を口にするのも恥ず
かしいが、

ポエブス神は父親の寝所と、忌まわしい寝床⁽²⁾、
よこしま

邪な結婚に汚れた寝床とを、その息子に恐ろしくも予言する。

この恐れこそがわたしを父の王国から逃れさせたのだし、

これがためにわたしは逃亡者となって家を捨てたのだ。

わたしは自ら自分を信頼せず、自然よ、あなたの法を守ったのだ。

あなたは、大きな禍いにおののくときには、

起こるはずがないと思うことさえ恐れる。

わたしはすべてをひどく恐れ、わが身を自分に任すことはしない。

今しも運命はわたしに対して何事かを企てようとしている。

二

(1) 月桂樹はアポロ神の神木であり、デルビにあるこの予言の神の有名な神託所を意味している。

(2) ポエブスは「輝く者」を意味し、アポロ神の呼び名のひとつ。

というのも、カドムス⁽³⁾の末裔たちの脅威となつてゐるこの疫病は、これほど広い範圍にわたつて殺戮を行ないながら、わたしだけを容赦してゐるということは何と考えるべきなのか。どんな禍いのためにわたしは取り置かれてゐるのか。

都の崩壊と、常に新たな涙で嘆き悲しまねばならない葬儀と、国の者たちの死骸の山の中に、

わたしは無傷で立つてゐる。当然ポエブス神に裁かれる者としてだ。

これほどの罪に王国が安寧のままに許されると

期待できただらうか。わたしゆえに天は危害を加えたのだ。

優しいそよ風が冷たい息吹によつて

熱にあえぐ人々の胸を癒やすことはないし、緩やかな西風も

吹きはせず、太陽は炎熱をもたらす天狼星の火を煽り、

ネメアの獅子⁽⁴⁾の背を押してゐる。

川から水は去り、草々に色はない。

ディルケの泉は干上がり、イスメノス川⁽⁵⁾の流れは細り、

むき出しの河床を乏しい波でぬらすこともほとんどない。

ポエブスの妹神⁽⁶⁾はおぼろげに空を滑り、

三〇

(3) テーバエの建設者。

四〇

(4) 英雄ヘルクレスは有名な十二の功業の最初として、アルゴリスのネメアの谷に棲む獅子を退治したが、この獅子が天に昇つて獅子座となつた。夏の盛りには太陽は獅子座に位置する。

(5) テーバエ近郊の泉と川。

(6) ディアナ女神のことで、月の女神としばしば同一視されることから、ここでも月を指している。

陰鬱な天は新たな雲に青ざめる。

晴れた夜に星が瞬くことはなく、

重く暗いもやが地に垂れ込めている。

天上の神々の城と館とを地獄の様相が

覆ってしまった。穀物は育っても実りを

与えず、黄金色となって高い穂を揺らせるとしても、

茎が枯れて実を結ばぬまま穀草は死ぬ。

破滅を免れて被らない階層はなく、

どの世代も、どちらの性も等しく滅びていく。

死に至らせる疫病は、老人のあとには若者を、

息子には父親を続かせ、同じ松明の火が夫婦をともに焼いて、

葬儀には悲痛な涙や嘆きはない。

それどころか、あまりに大きな禍いのなす執拗な破壊のために

目は乾ききり、最悪の事態にはそうなるように、

涙はかれ果てた。こちらでは病んだ父親が子を

最後の火へと運び、またこちらでも正気をなくした母親が子を運び、

急いでいるのもう一人を同じ火葬の薪へと再び運んでくるため。

いや、さらには、悲しみの最中に新たな悲しみが生じ、

葬儀に参列していておのれの葬送が降りかかってくる者も。

それから自分たちの死骸を他人の炎で焼くことになるのだ。

火が奪い取られるのだ、哀れな者たちには恥じる心はないから。

集められた骨は区別された墓の盛り土が覆うわけではない。

焼かれたというだけでも十分なのだ、どれほどが灰になれることか。

地には墓とする余裕はなく、森はもはや火葬の薪を出すことを拒む。

祈願も、どんな医術も、病に襲われた人々を癒やしはしない。

医者も倒れ、病は助けとなる者をも引つさらう。

祭壇にひれ伏すわたしは嘆願の手を伸ばし

運命が早まることを求める。祖国の瓦解に自分が

先んじるように、そしてすべての者たちのあとに自分が倒れ、

わたしの王国での最後の葬儀となることなどないように。

ああ、あまりに残忍な神々よ、ああ、重苦しい運命よ。

これらの人々の中でわたしにのみ死は拒まれているということなのか、

これほど身近な死なのに。死を呼ぶ手で汚してしまった

この王国を遠ざかるのだ。涙を、死の弔いをあとにするのだ。

不吉な客人として自ら持ち込んだ、もの皆を朽ちさせる
病んだ空気を去るのだ、もはやすぐに立ち去るべきだ、
向かう先は両親のもとであつても。

イオカスタ

あなた、嘆きで禍いをさらに重くして
何の助けとなりますの。わたしはこういうことこそ王にふさわしいと思
います。

逆境をもちこたえ、立場が危うければ危ういほど、
支配権という巨体が倒れようと大きくぐらつけばぐらつくほど、
それだけいつそう踏ん張って、勇気をもつて確かな足で立つことこそ。
運命の女神に背を向けるのは男らしいことではありません。

オエディプス 臆病という非難や叱責はわたしには遠く当たらないし、

わたしの勇気はおじけた恐怖などは知らない。

わたしに対して剣が抜かれたとしたら、もし軍神マウオルスの⁽¹⁾
恐ろしい力がわたしに襲いかかるとすれば、獐猛な

巨神族に対してさえ、わたしは大胆にも立ち向かうことだろう。

不可解な仕方で言葉をつなぎ合わせるスピックス⁽²⁾から

わたしは逃げなかった。言うも恐ろしい謎歌いの血塗れの口に

六〇

六〇

(1) マルス神の古名。

(2) 顔は人間、体は獅子で、大きな翼を持った怪獣。テーバエの近くの丘に居座り、通りかかる人に謎をかけて、解くことができないとその者を食らっていた。

耐え、散らばった骨で白くなった地面に留まった。

そして、すでに怪物が上方の岩壁から獲物を見下ろしつつ翼を構え、尾の鞭を振るって

残忍な獅子のように脅しを利かせたときに、

わたしは謎歌を求めた。すると頭上に恐ろしい音が響き、

顎がきしむ音をたて、爪は待ちきれずに

わたしの臓物を求めて岩を引つ掻いた。

占いのもつれた言葉と、絡み合った計略と、

そして翼ある獣のぞつとする歌とをわたしは解いたのだ。

（自分に向かつて）

血迷って遅くも今、死を願うとはなぜなのか。

死ぬことはできたのだ。この王笏がおまえの名声の

報いであり、これがスピックスを滅ぼした褒美としておまえの得たものだ。

だが、あの狡猾な怪物の恐るべき灰は

わたしに刃向かい、あの滅ぼされた悪疫めが今

テーバエを滅ぼそうとしている。もはや残された救いはただひとつ、